

児童における個人内の目標設定の位置づけが 問題解決訓練の効果に及ぼす影響

The effect of the intra-individual goal orientation on the effectiveness of problem solving training in children

角 沙織 (Saori Sumi) 指導：嶋田 洋徳

問 題

本研究では、児童生徒を対象とした問題解決訓練において主に扱われる「解決策の案出」、「解決策の評価」の問題解決プロセスの個人差とストレス反応および学校不適応感の関連性における、目標の個人内の位置づけの媒介効果について検討することを目的とする。

研究1-1 目標の個人内の位置づけが問題解決の効果に及ぼす影響

方 法

研究協力者 小学校5年生、6年生の児童189名。

調査材料 ①小学生用ストレス反応尺度 (嶋田他, 1994), ②小学生用学校不適応感尺度 (戸ヶ崎他, 1997), ③小学生用ストレス尺度 (嶋田, 1998), ④小学生用社会的スキル尺度 (嶋田, 1998), ⑤小学生用ストレスコーピング尺度短縮版 (大竹他, 2001), ⑥目標の個人内の位置づけ (本研究で作成): 刺激場面に対する目標設定の理由について自由記述による回答を求めた, ⑦解決策の案出テスト (高橋, 2009), ⑧解決策の評価テスト (高橋, 2009)。
手続き すべての指標について、クラス単位で実施された。

結果と考察

個人内の目標設定の位置づけの特徴 (否定的事象回避優位群, 肯定的事象の獲得優位群) および解決策の案出および評価の特徴 (標準案出・向社会評価群, 攻撃案出・向社会評価高群) と, ストレス反応および学校不適応感について検討した結果, 向社会案出を多く行い, 目標設定において肯定的事象の獲得が優位な児童は, 身体的反応が低いことが示された。また, 攻撃案出が多く, 肯定的事象の獲得が優位な児童は, 学業関係の不適応感が低いことが示された。この結果から, 個人内の目標設定の位置づけの差異と問題解決プロセスの個人差によって, ストレス反応および学校不適応感へ及ぼす影響が異なることが示唆された。

研究1-2 目標の個人内の位置づけに対する心理教育を含めた問題解決訓練の効果の検討

方 法

研究協力者 小学校5年生、6年生の児童189名。解決策の案出および解決策の評価についての授業を行う群 (案出・評価群; 5年生) と, 案出・評価群の内容に加え目標設定を扱う群 (目標設定群; 6年生) に割り当てられた。

調査材料 研究1-1と同様の測度を使用した。

手続き 授業実施前pre調査を実施。その後, 1時限45分の授業を2時限実施。授業1週間後にpost調査を実施。授業内容:両群に共通して, 1) 問題の明確化と定式化, 2) 解決策の案出, 3) 解決策の評価に関する授業を実施。目標設定群では, 4) 目標設定に関する内容が含まれた。

結果と考察

ストレス反応について, 目標設定群において身体的反応 (Figure), 無気力得点に有意な減少が見られた。このことから, 目標設定を重視した授業によって, 身体的反応および無気力が低下したことが示唆された。一方, 目標設定群において時期による変化が見られなかった。したがって, 学校不適応感については, 学校不適応感に関しては, 目標設定を重視した授業の影響は示されなかった。

総合考察

本研究から, 児童における問題解決プロセスの個人差とストレス反応および学校不適応感が関連に, 個人内の目標設定の位置づけが媒介している可能性が示唆された。また, 研究1-2の結果から, 問題解決訓練のストレス反応への効果の向上に, 個人内の目標設定の位置づけを考慮することの有効であることが考えられる。一方で, 学校不適応感に関しては変化が見られなかった。その結果については, 1週間後のpostではフィードバックを受ける機会自体が少なかったことに起因している可能性が考えられる。したがって, 学校不適応感に対しては, 長期的なフォローアップでの検討が必要であると考えられる。

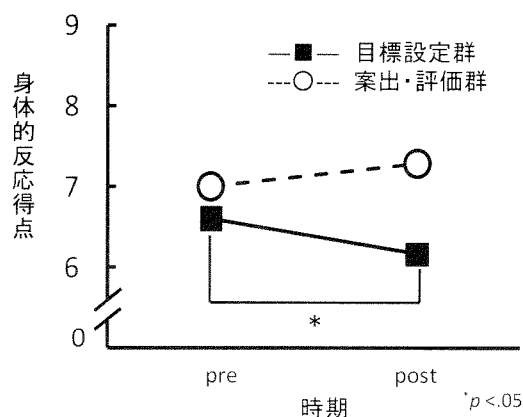


Figure 各群における身体的反応得点の変化